The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Emotional recognition ability among children with high-functioning autism spectrum disorder
Author(s)	衛藤, 萌
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50586
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　衛藤　萌　）	
論文題名	Emotional recognition ability among children with high-functioning autism spectrum disorder　（高機能自閉症スペクトラム児の情動認知特性）

論文内容の要旨

〔　目　　的　〕

他者との円滑なコミュニケーションにおいて、適切な表情認知をすることは欠かせない要素である。自閉症スペクトラム障害(ASD)者・児は、その中核症状である社会的相互作用の障害の背景に、この表情認知に困難さがあることが指摘されている。これまでの表情認知研究において、高機能ASD児はTD児と同等の課題成績を示す報告もあり、表情認知困難さについての見解はいまだ一貫していない。その理由として、高機能ASD児は、表情認知処理において、TDとは異なる処理を代替方略として用いることで困難さを補っていることが、神経イメージング研究によって証拠づけられている。しかしながら、実際の日常生活場面で、ASD児は他者の感情理解が出来ないなどの問題から、社会生活において様々な問題を抱えているのが現状である。このことから、日常生活場面では、表情認知や他者感情理解において、高機能ASD児の用いる代替方略では補えない能力が求められていることが考えられる。これまでに高機能ASD児とTD児の課題成績に顕著な差異が認められた課題の多くは、単純な表情認知課題に比べ、この日常生活場面が反映されていることから、高機能ASD児の実際の表情認知困難さを捉えるためには、より日常生活に近い状況を反映した課題を用いることが重要である。本研究では、高機能ASD児の表情認知困難さを包括的に捉えるために、これらの課題を複数組み合わせて検討することを目的とした。

〔　方法ならびに成績　〕

高機能ASD群として、大阪大学医学部付属病院でDSM-Ⅳ-TRに基づいてASDと診断されたIQ75以上の8歳から12歳の児童17名(男児14名、女児3名；平均年齢9.4±1.3歳)、TD群として通常学級に在籍し、神経発達的な既往歴のない8歳から12歳の児童26名(男児16名、女児10名；平均年齢9.8±1.3歳)を対象とした。対象者および対象児の養育者に同意を得た後、3つの表情認知課題(The Eyes Task、The Morphed Faces Task、The Movie Stills Task)を実施した。全ての課題の刺激はPC画面上に提示され、対象児は提示された刺激に対して感情判断を求められた。課題の実施順序は対象児間でカウンターバランスをとった。

本研究の結果、The Eyes Taskにおいて高機能ASD児はTD児よりも有意に低い正答率を示し、より難しい感情の判断に困難さがあることが示された。The Morphed Faces Taskでは、恐怖表情においてのみ、TD児よりも低く評定することが示され、基本的な感情の認知は曖昧な表情からも読み取り可能であるが、恐怖表情は認識しにくい傾向があることが示された。The Movie Stills Taskでは、表情情報の有無にかかわらず、高機能ASD児はTD児よりも有意に低い成績を示し、文脈的な情報の読み取り困難さがあることを示す結果となった。

また、高機能ASD児のIQスコアと課題成績との関連を検討したところ、知覚統合とThe Movie Stills Task with Facesの成績との間に有意な正の相関が得られ、高機能ASD児は知覚統合能力が低いほど、表情と文脈的情報の統合が難しいことが示唆された。

〔　総　　括　〕

本研究では、高機能ASD児の表情認知困難さを包括的に捉えることを目的とした。その結果、高機能ASD児は、表情の読み取りにおいて、基本的な感情の識別や表情を感情情報の手がかりとして適切に利用することはTD児と同様にできる一方で、複雑な感情判断や文脈的な情報と統合しての判断が困難であることが示された。このように表情認知一つとっても、できる部分とできない部分が内包されていることが、日常生活場面において生じる高機能ASD児の困難さの要因の一つと考えられる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　衛　藤　萌　）			
論文審査担当者		（職）	氏　　名
	主　査	教　授	棟　居　俊　夫
	副　査	教　授	金　澤　忠　博
	副　査	准教授	平　井　　啓

論文審査の結果の要旨

精神医学の臨床において、患者の表情の観察は、ふるまいや談話の観察と並んで、診断や症状評価に際してきわめて重要である。表情から精神内界を人々の想像以上に読み取ることができる。医療の診察の現場は診察者と患者との特殊な対人交流の状況を示しているかもしれない。しかし、それは、親子や恋人同士の交流に並ぶ、深いやり取りである。ところで、自閉症スペクトラム（autism spectrum disorder, ASD）の方々が患者として診察室に現れたとき、表情から内界を推測することはなかなか難しい。知的障害を有していると表情からの推測はさらに難しい。一方、療育の現場で「パニック」と呼ばれる興奮の中にいる患者の表情はいかにも苦しそうだが、本当に苦しいのかどうかの確かな根拠はない。

逆に、ASDの方々が周囲の人々の表情をどのように見ているのか、これは興味深い課題である。名前と顔の一致はできるように思われる。顔を間違えるという話は聞かない。この顔の人は「〇〇さん」と答えられる。人の顔の記憶にも問題はなさそうである。何年かぶりに会った時に「〇〇さん、こんにちは」と正答している。しかし、相手の喜怒哀楽の顔が分かるかどうか。ASDの心の理論障害仮説を踏まえると、喜怒哀楽、つまり情動を示している顔（表情）の理解が、定型発達の人々の理解と異なる可能性がある。これは研究の主題となるだろう。

衛藤萌さんの論文は、ASDにおける情動的な表情の認知を、主に学童期の子どもを対象に、あいまいな内容の表情からなる3種類の課題により評価した研究である。あいまいな内容の表情とは、第一に俳優の眼差しの部分だけの写真を見せて、情動を推測させる課題、第二にある情動の表情が徐々に形を変えて中性（neutral）の情動になる過程の写真を提示して、元の情動の表されている程度を答えさせる課題、第三、登場人物のいるある場面を提示して、その場面がどのような情動を表しているかについて推測させる課題である。これらの課題はLoshらの報告と同じ課題である（Losh M et al., Arch Gen Psychiatry, 2009; 66: 518）。衛藤さんは、これらの課題が日常生活において人々が見せる表情に近いため、典型的な情動を示す顔写真を提示する課題よりも、より自然な表情認知課題であるとしている。

ASD児童17名、年齢と性別が統制された定型発達児童26名が対象となり、研究内容の説明を受け、本人と両親から書面による同意が得られてから、課題が遂行された。第一の課題の結果について、ASDの成績が定型発達に比べ有意に悪かった。第二の課題の結果について、喜び顔、悲しみ顔では両群の間に差はなく、恐れ顔においてのみASDの成績が定型発達に比べ有意に悪かった。第三の課題の結果について、ASDの成績が定型発達に比べ有意に悪かった。以上より、ASD児童はあいまいな内容の情動顔、特に恐れ顔の認知がうまくできないことが示唆される。

情動的な表情の認知に関して、画像研究は数多くなされているが、行動実験は意外なほど少なく、かつ衛藤さんも述べられているように、一定した結果が得られていない。さらに、衛藤さんはこの不一致の要因を知的能力の相違、代償機能の獲得の有無に求めている。そして後者の代償機能に関して、日常生活により近い状況を示す課題を使用して、代償機能が働かないような条件での検討が必要だろうと述べている。

本研究は、十分な事前の準備の元、ある程度の比較可能な人数の対象者を集め、定型発達児童の知能検査がなされていない欠点を有するものの、結果の解析は適切に行われ、考察も練られている。Loshらは成人のASD者を対象に報告しているが、本研究は児童を対象としており、相互補完的な研究と言える。情動的な表情認知の行動実験が少ない中で、このような結果を得ることができた本研究は学位に値するものと認める。